
世界の窓が全開ですよ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の窓が全開ですよ

【Nコード】

N2225Y

【作者名】

雨月

【あらすじ】

彼の名前は新戸風太郎。探せば世界に三人ぐらいは似ている人がいるといわれる高校二年生の生徒会長である。二学期の初日、彼は久々に友人に出会った。

第一話：一陣の風

第一話

俺の名前は新戸風太郎。羽津高校に通う高校二年生である。実年齢と彼女いない歴が一緒という世間一般的な男子生徒だと自分では思うわけだ。いや、もしかしたら全校生徒中の約半数が心のどこかで俺の事を好きかもしれないと言う確率は無きにしも非ず……まあ、こんな情けない感じだが、一応生徒会長をしているのだ。

今日から高校二年生二学期が始まる。中だるみにならないようにしろとのお達しが夏休み前に先生から出ていたものだが、勉強合宿やらなんやらで俺の夏休みは一カ月もなかった。

「おつかしいなあ」

いつもポストに入っているはずの手紙が今日は来ていなかった。他の郵便物は来ているから郵便配達のおっさんが遅れていると言うわけでもないはずである。まあ、目的の物が入っていないのならそれはそれで構わない。文通相手への返事が面倒だからである。

ちょっと心配になりつつも、俺は学校へと行くことにした。

二学期一発目という事もあり半日で学校は終了。生徒会も明日からだし、今日は遊んで帰ろうかしらと下駄箱を乱暴に開けてみた。

「あん？」

靴の上に一通の手紙が置かれている。

『拝啓、新戸風太郎様。本日の放課後、生徒会室にて待っています。』

女の子らしい文字、俺は念のため鼻を近づける。

「くんくん……女の子の匂いだな。きつと俺の事を生まれる前から好きだったに違いない。男の匂いは一切しないしクラスの連中の仕業でもなさそうだ」

俺にもね、好きな人の一人や二人はいるものさ。でもなあ、一人はこの高校にいればかり思っていたら海外に行って行方知れずだ

し、もう一人は転校してしまっただよ。思いも伝えられないへたれ野郎と罵るがいいさ。

さて、それはそれ、これはこれである。女の子を待たせるのは古来より悪いものだと俺は親父に教わっている。近くの男子トイレへ入って寝癖を一生懸命押しつける。第一印象がよいように身だしなみチェックを怠ってはいけない。

「…………寝癖があるのはぐっすり眠れたって事だ」

去年から使用している生徒会室へと足を向ける。『男の園』と呼ばれし俺の牙城はその名の通り全員男子生徒（イケメン、体育会系、文系、理系、なんちゃってチャラ男等）で構成されている為副生徒会長、あるいは書記長の女子と淡い恋物語を想像していた俺はショックだ。

「あ、あの、生徒会長…………私、生徒会長の事が好きで生徒会に入っただんです。副生徒会長、がんばりますっ」

しつこいが、こんな甘い展開は一切ない。副生徒会長も友人の男子生徒でがっかりである。

もう少して生徒会室と言うところで副生徒会長に出会った。

「新戸君ではないですか。遅かったですね」

眼鏡の秀才、中州秀作が俺を見上げるようにして首をかしげる。

「中州、お前まだ帰ってなかったのか？」

「ええ、ちょうど新戸君を呼びに行ってから帰るつもりでした」

「俺を呼ぶ？先生か？校長か？はたまた写真撮っていたのがばれたソフト部の部長にか？」

いい尻だった。今度はテニス部にカメラを持って行こうかなと思う。

「いえ、手紙を渡していると言っていたのですがもらっていないのですか？」

「ああ、手紙ならもらった」

俺がそう言っ手紙を見せる。それに触ろうとしたものだから齒をむき出して威嚇すると意外そんな顔をして手を引っ込めた。その

後、中州は一度頷いて手を振ってくる。

「それなら話は早いですね。僕はもう会ってきましたから失礼します」

「気を付けて帰れよ」

「ええ、気を付けて帰ります」

中州が廊下の角に消えてそこで首をかしげてしまった。

「ん？あつてきた……ってどういうことだ？」

まさか、俺にラブレターを渡してくれた相手は中州の方にも同じようなラブレターを？いや、しかし、中州には許嫁という古臭くも一度はあこがれるような相手（母親に確認したところ、俺には許嫁はいなかった）がいるから大丈夫だろう。

いや、待てよ？そういうえば今日の朝、手紙が来てなかったな。そして、放課後手紙が来た。

改めて手紙を見てみる。

「……………まさか、な」

頭の中にぼっくり浮かんでいた一つの可能性を即座に打ち消し、それでも時間を確認する。

「……………あたっていたとしたらそろそろ許容範囲ぎりぎりか」

時間につるさい相手の為廊下を走り、急いで生徒会室前へ。その前で俺はもう一度身だしなみをチェックしてオーケーを出す。

軽く扉を開けると、当然ながら生徒会委員は一人もいない。

だが、一人の比較的小さな女子生徒が立って俺を迎えてくれた。

「新戸生徒会長、お久しぶりです」

きつと、今の俺の顔を見たら誰もが『まるでアヒルだった』と言ってくれるだろう。そうさ、俺はいつだって醜いアヒルの子。

第一話：一陣の風（後書き）

チャック全開ですよ、とはまた違う話です。続編じゃないですね、はい。本来は一つの作品にまとめられるべき話だったのですが、諸事情によりあちらは生徒会長の話でまとめた（つもり）ということになっていきます。前作が微妙だったのでこちらはそれなりに頑張ろうと思います。

第二話：マイフレンド

第二話

男の牙城、女子生徒たちからは。の穴と呼ばれている生徒会室に少し身長の高い女子生徒が立っていた。

「倉山千穂……」

ついフルネームを口にしてしまう。

「お久しぶりです」

少々、相手も緊張しているようだ。

俺が中学の生徒会長だった頃、千穂は副生徒会長だった。ちなみに中州は書記長である。

俺が黙っていると千穂は首をかしげた。

「もしかして身体の具合でも悪いのですか？」

「そんなわけないだろ。久しぶりにあったから驚いているだけだよ」
「そうですか。それなら問題ないですね。椅子があるので新戸先輩、座ってください」

此処は俺の牙城のはずである…はずんだけどなあ。有無言わさない口調だからしょうがない。ここで嫌だとか否定的な態度を取ると面倒な事が起こる。

千穂の対面に座り、俺はため息をついた。

「やはり、高校の生徒会長というものは中学の生徒会長よりも大変なのですね」

「え？」

「ため息が出ていたのでそう思いました」

「あ、ああ……まあ、そんなもんだ」

まさか千穂がいたから…なんて言えないな。

「それで、お前なんでここににいるんだよ？ああ、もしかしてまだ夏休みだから会いに来てくれたのか？」

「いえ、違います」

もっさ、この時点で鈍くない俺はなんで此処にいるのか気付いていたよ。でも、認めたくないって言う気持ちの方が大きいよ。

「あゝじゃああれだな。こっちの近くにたまたま寄っただけか？そうなんだろう？」

「いえ、こちらにまた引越してきたのです」

ほーらね、やっぱりだ。俺の嫌な予感って言うのは素っ裸で警察署に行ったら捕まるのと同じくらいの確率で当たる。

「あ、あゝ……そうなのか」

「ええ、そうです」

「そうか……」

俺の対応に千穂は首をかしげていた。

「……私はこうしてまた新戸先輩や中州先輩に会えたりした事が嬉しいのですが新戸先輩はそうではないのですか？」

「ああいやいや、嬉しいぞ、うん、嬉しいけど気持ちの整理が出来ていないからちょっと驚きの方が大きいだけだ。ところで、家の方はまた前と同じ場所なのか？」

中学校の隣に家があった。夕飯に呼ばれる事も稀にあったが、千穂の親もちよつと相手したくない部類ではある。

「いえ、違います」

「もしかして高校の隣か？」

それならまあ、千穂らしいと言えるんだけどな……

「いえ、新戸先輩の家の隣です」

もし、俺の家の隣なんて言われた日には……

「あれ、悪い、聞きとれなかったからもう一度教えてくれないか？」

「はい、新戸先輩の家の隣に引越してきました」

きつと、俺の前世は神と敵対していたのだろう。だから、神様は俺に対してこつても悪い状況をセッティングしてくるのだ。そういえば昨日の深夜に隣に車が止まったような気がしなくてもなかったかなあ。

「そ、そうか……あ、じゃあとりあえず帰るか？」

「はい」

その日の夕方、俺の家に倉山家が挨拶にやってきた。

「お隣に引っ越してきた倉山です」

「御無沙汰してます」

「こちらに帰っていらしたんですね」

両親が懐かしそうに話しこんでいる中、俺は隣で固まっている愛夏を見てそつと肩に手を置いた。ちなみに、愛夏は俺の妹ではない。親戚で、俺の妹分みたいなものだ。世界一周に両親が旅だった為、こちらに居候している。

「あ、兄貴…倉山って…」

「ああ、お前の想像している通りだ」

「よ、よかったねー、兄貴。お目付け役がいなくて寂しかったんじゃないの？」

「ははあ、俺だけじゃなくてお前のお目付け役って感じもするんだよなあ」

「風太郎君、久しぶりだね。ちょっと話をしようじゃないか」

「あ、はい」

千穂父に呼ばれて俺は前へと移動する。愛夏はすぐに引っ込んだ。「今度ぜひ、夕飯と一緒に食べようじゃないか」

「はい……近いうちに必ず……」

「ああ、千穂の事をよろしく頼むよ」

「え、ええそれはもちろんです」

受け答えが面倒だから呼ばれたくないんだけど、いずれまた呼ばれるんだろうな。

でもまあ、宿命ってやつなのか俺が呼ばれたのは次の日だったりする。

第三話：さわり

第三話

「ほらー、朝だよつ。もうつ、あたしがいないと朝も起きれないんじゃない以外に婿の貰いていないんじゃないの？」

なんて事は絶対に起こり得ない。いや、人によっては起こりえるらしいのだが、俺にとっては妄想の産物でしかない。重ねて言うが、人によっては起こりえるらしい。大切なことなので二回言いました。現実にはまあ、女の子が一応起こしに来てくれるからそれだけ見るならいいほうかもしれない。

「新戸先輩、愛夏さん、朝ですよ」

ちなみに、起こしてもらいたい女性像は『立派な年上の女性』である。真面目だが、どこことなく小生意気なところのある年下の女の子ではない。起こすときにピンポイントで日光を目に当ててくるような少女ではないのだつ。

「…眠い」

「兄貴、しょうがないよ。起きよう」

「……わかった。二人ともおはよう」

「おはようございます」

「おはよう」

かすかに残る眠気を昼過ぎまで脳内にとどめておくとしよう。爽やかな朝を迎えることなんて九月じゃ無理だろ。残暑の中目を覚ますなんて暑くて仕方がないんだよ。

「新戸先輩、シャツです」

「おう」

俺は起きてすぐに顔を洗い、歯を磨き、朝食をとったあとに着替え、トイレに行ってレッツラゴーというスタイルを取っている。でもまあ、可愛い後輩がシャツを出してきたのなら最初に着替えると言うのもいいかもしれないな。

べたつくパジャマの上を脱いでシャツを着る。

「兄貴、ズボンだよ」

「あいよ」

可愛い妹分がズボンを持ってきたのなら履くしかないだろう。俺はパジャマの下を脱ごうとして四つのおめめへと注意を向ける。

「何だその期待した目は？」

「別に何も」

「期待なんてしてないよ」

「そうかい、それならいい」

さつさとズボンを履く。二人の視線が俺に新たな趣味を誕生させるかもとちよつとばかり脳裏をよぎる。しかし、あくまで自分がノーマルであると言う事を教えさせられた。

朝のこまごまとした事を終えて登校。俺と愛夏、そして千穂が三人並んで学校へと足を進める。

「愛夏さんが新戸先輩の家に居候しているとは知りませんでした」

「ああ、愛夏の両親が世界一周旅行に行っちまって帰って来ないからな。連絡もつかない相手だし、今頃どこを彷徨っているんだろうか」

「この前はカンボジア辺りから手紙が来てたような気がするけどどうだろう」

娘の事をほっぽりだして世界一周だから性質が悪い。愛夏が気にしていないようだからいいものを、もしもぐれたりしたらどうするつもりなんだろうか……まあ、その程度でくれるというのも変な話ではあるか。

「寝室は新戸先輩と同じなのですね」

「そだよー、だって寝る場所がないから仕方ないもん。居候が部屋を要求したらまずいでしょ？」

「確かにそうですね。でも……」

何かしら言葉を続けようとした千穂が前を向いて固まった。

「ん、どうした？」

「あれ」

「え？あれ？」

指差す方向を俺と愛夏も見る。赤いシートのようなものが民家の玄関から出てきて前に止まっている高級そうな車の後部座席まで続く。

「お嬢様、月一の車登校でございます」

「間山さん、ありがとう」

黒髪縦ロールの女の子が一人、家から出てきて一瞬だけ俺たちの事を見た。

「ふんっ」

そういつてそのまま車に乗り込み、車は去っていく。

「あれは……何ですか？」

「高級車だろ」

「偽物っぽいお譲さまも付属していたね」

考えたところでしょうがないので俺は歩き出した。

「兄貴、気にならないの？」

「いや、別に。制服みたところ俺達と同じ高校じゃないみたいだしなあ。転校生が来るって言うのも聞いていないから遠い高校だろ」

「そうですね」

もはや興味はないといった様子で千穂も俺の隣にやってきた。

「新戸先輩」

「何だよ」

「今日の昼休み、先生に頼んでみますのでその時はよろしくお願いします」

「いまいち理解できなかった。」

「何の事だよ？」

「生徒会の事です。詳しい事は昼休みの時に話しますので……愛夏さんもどうですか？」

「え、遠慮しておくよ」

若干笑顔がひきつっている。

ふーむ、そうか、千穂は生徒会に入りたいのか。その時はよろしく
お願いしますって、別に生徒会長が絶対的な権利を持っているわけ
でもないんだけどな。漫画やドラマに出てくるような生徒会長なん
て殆どいない。自発的に行動する人なら先生に無理を言えば何とか
なるだろう。生憎、俺はそんな生徒会長じゃないからな。

千穂の期待する視線が何を期待しているものなのか、俺にはいま
いちわからなかった。

第三話・さわり（後書き）

全体投稿数としては前作と同じくらいまでいけたらいいですね。
ま、行かないなら行かないで構いませんがそれなりにがんばります。
前回はほぼ毎日更新してきました。ですが、今作では無理っぽいで
す。

第四話：仲の良い二人

第四話

午前中の授業が終わったなら何が待ち受けているのか……当然、昼休みである。弁当学生は弁当を、食堂学生は定食を、購買学生はパンを奪い合って腹を満たすのだ。

俺は弁当学生の為に机をくつつけて友人たちと一緒に弁当をつつく。

「なあ、ジュディー」

「ん？どーしたの？」

金髪碧眼、美人でスタイル抜群の全男子憧れの的……中州ジュディーに質問することにした。

「毎日中州の弁当作ってるけどやっぱり大変か？」

「ん？そうね、結構大変だけど将来を誓った秀作の為だもの。苦も楽になるわ」

「ありがとう、ジュディー」

隣にいる中州が頬を染める。男子生徒の間からは『ちつ、ブツ飛ばすぞ』や『中州秀作が浮気して刺されますように』といった穏やかではない言葉が飛びかっている。

「ふうたろーにはお弁当を作ってくれるような娘、いないの？」

憐れむように、と思うのは俺の心が見せる幻影なのだろう。でもどこか、『どう？ 私たちはとても幸せなの』といったオーラを出している気がする。

「ん？愛夏が頑張って作ろうとするんだけどな。俺が作ったほうがうまいから駄目だ」

下手ではない、下手ではないが……自分で作ったほうがコスト面、タイム、見栄え等々、いいのである。

「そつえば愛夏ちゃんのお弁当を作っているのは新戸君でしたっけ？」

「ああ、うちの母ちゃん今は朝が早いからな。必然的に自分の弁当も自作だ。あー、クラスのアイドル的な子が俺の為に弁当とかつくってきてくれねえかなー」

俺のこの言葉を聞いた男子連中がまた何か言っているようだ……『それはないでござる』『中州秀作が浮気して刺される確率よりひどいでござるよ』……お前ら、後で覚えておけよ。

弁当を食べ終えたところで放送が鳴りだした。

『二年A組、新戸風太郎君。職員室まで来なさい……繰り返します……』

ああ、そういえば呼ばれていたんだっけか。

「会長、女の子が来てますよ」

「女の子？」

渡りに船とはこのことだ。グッドタイミングで呼んでくれるとは……このままかけおちでもしようかしら。

心を弾ませながら教室の後ろの方を見ると千穂が立っていた。手の早い男子達数名が千穂の周りに群がる。

「ねえ、君何年生でござる？一年生でござるか？」

「お金あげるから拙者と遊ばないでござるか？」

「お前ら何気持ちの悪い事してるんだよ。ほら、散れっ」

男子を蹴散らし、千穂の前にやってくる。

「どうしたんだ？」

「どうした、ではありません。お昼休みお願いしていたではありませんか」

怒っているようだ。さっきまで千穂の周りにいた男子達も『あの会長に楯突くような女の子は遠慮しておくでござる』といって席についている。

「悪かった」

「……早く行きましょう。先生も待っていますから」

ジュディー達に身振りで行ってくるわと伝えて教室を後にする。

「ふうたるーは『このまま海に行つて来る』ってジェスチャーしたに違いないわ」

「いや、違いますよ。きつと『このまま峠を攻めてくる』でしょう」
俺らの心はいつも一つにつながっている……はずだ。

職員室へ行く途中トイレに寄った。千穂を待たせる為、手早く廊下に戻つてくると千穂がいきなり手を伸ばしたきた。

「チャックが開いてます」

「言ってくれば俺が自分でするっての」

こんなところ他の生徒に見られたら馬鹿って思われてしまう。

「あ……」

「ん？どうした？」

「布が噛んでしまいました」

チャックが全部上がりきることなく、途中で止まってしまっている。千穂は膝立ちになって噛んだ布を外そうとしていた。

「おい、これはまずいって。俺がやるから離れてくれよっ」

「いえ、私の失敗ですから」

失敗したら絶対に自分の力で何とかしようとするその責任感……残念ながら今は要らないんだ。中学生のときだって全く同じことがあったのにまたやるとは成長していない証なのではないだろうか。

「せ、生徒会長があんなことさせるなんて……」

「うわ、こんなところで？あり得ないっ」

ああ、ほら、俺に幻滅した女子生徒たちが去って行っちゃったじゃないかっ。

「終わりました」

「……………ありがとよ」

下手したら次の校内新聞は『あの生徒会長が下級生に対して。。。な事を…………』とかやってくれそうである。新聞部の部長は可愛いんだが、そういったネタが大好きだからな。普通に『無念！野球部初戦帰還』とかやってほしいものだ。まあ、ガードが緩いからいくら写真でもつけさせてもらっただけ。

「では行きましょうか」

「おう」

他にハプニングが起こることなく、無事に職員室までたどり着く。身なりを整え、職員室の扉をスライドさせる。

「失礼します」

「やっと来たか。お前にしては遅かったな？」

「すみません、途中トイレに寄っていたので遅くなりました」

俺を呼び出した教師のところまで千穂を伴い歩いて行く。

「それで用事とは何でしょうか？」

「うん、実はお前の隣にいる倉山千穂さんが生徒会に入りたいそうなんだ」

「…なるほど」

千穂はお願いしますとばかりに頭を下げている……俺ではなく、先生に。

「こっちは別に生徒会に入れてあげてもいいとは思うんだがな。生徒会長はお前だ。入れる、入れないにしてもしつかりとした理由を聞きたい」

「ぼく個人としての意見は入ってもらって構わないと思います。中学生のころから倉山千穂さんは優秀でしたからね……ですが、転校してきて間もない状態で彼女が生徒会の活動に参加するのも如何なものかと思います」

「何故だ？」

なるべく千穂の方は見ないようにしておいた。

「文化祭の準備がそろそろ始まります。放課後、せっかく友人と仲良くなるチャンスを生徒会に呼ばれて潰してしまうと言うのも勿体ないものです」

先生は顎に手を当てて考え込んでいる。

「じゃあ駄目と言う事か？」

「ええ、生徒会には入れないほうが彼女の為になるでしょう」

「納得できませんっ」

両手をグーにして俺を睨みつけてくる。

「まあ、倉山千穂さん怒らないで下さい。まだ話は済んでいません

から」

「？」

ちゃんとさっきの言葉に続けようとしたセリフを口にする。

「生徒会には入れられませんが、ぼくが一個人として彼女に手伝ってもらおうと思います。それなら倉山千穂さんが友人と遊びに行くときなどは自由ですからね」

「そうか、回りくどい感じがするがお前がそういうのなら好きにするといい」

「新戸生徒会長、よろしくお願いします」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。倉山千穂さん、一緒にいい高校にしましょう」

モテるイケメン生徒会長になりたいものだ。ということでもまずは丁寧な感じを与える口調から入ってみている。

一瞬、そう、ほんの一瞬だけ千穂が普段とは違う『憧れの先輩で嬉しい』みたいな表情をしてくれたのが嬉しかった。

「これでぼくは失礼します」

「ああ、待て。お前を呼んだのはその為だけじゃない」

先生は机の引き出しから一冊の冊子を取り出し、俺に渡したのだ。つた。

第四話：仲の良い二人（後書き）

いまいち面白くないというのはなんとなくわかります。前作も読んでくれている人があまりいませんでしたからね。まあ、タイトル、内容等で見切りをつける人もいるんでしょう。読者がすべてというわけではないですけどね。書く側としてはそれなりに意見もらった方がうれしかったりするのです。辛口？駄目だし？下手すると感想読んで数日はへこんだりしていますけどね。昔はよく他の作者さんと駄目な部分を教えてもらったり等の交流があったものですが、今ではさっぱりです。忙しいというのもありますが…。今回の話の後には数日生徒会室での倉山千穂の仕事ぶりのつもりでしたが話変更で主題となる文化祭の話に移行します。

第五話：しばり

第五話

放課後、今日の晩御飯は千穂の家で御相伴にあずかることになっている。しかし、その前にファミレスに行かなくてはいけない。

先生からもらった冊子には『文化祭連携案』と書かれていた。なんでも近所の女子高がこの高校と文化祭について話し合いたいとのことである。えへへ……女子高かあ……。

「さーて、女の子と会ってきますかね」

まあ、残念ながら千穂も一緒の為に変な真似は許されないがな。千穂が自ら先生にお願いし、書記として同伴することである。

廊下に出ると既に千穂が待っていた。あれほど昼休み千穂に群がっていた男子どもは千穂の事をまるで見えていないかのように避けていたりする。

「行きましようか」

「そうだな」

ファミレスまでそんなにかからないからな。道中、変な人に会ったりハプニングも起きなかった。

相手が来ていないようなので適当な席に座って待つことにする。

「女子高とのことですが」

「それがどうかしたのか？」

「いえ、中学生の頃の新戸先輩とは変わっているようですので何も心配することはないと思います」

「はは、当然だろ。俺は変わったんだよ」

変わってないさ。ええ、変わっていませんとも。可愛い女の子がいたらそりゃ、誰だって胸がときめきますとも。心のどこかでああ、この子と仲良くなりたいなあとかで……ぐえへっへっへ……。

ま、愚痴るわけじゃないんだが高校はいつでも俺に告白してくるような相手は当然おらず、たまに話題に出る『誰が好き？』という

ようなことも俺が答える前に『新戸には中学時代に』って感じていないはずの千穂が俺の彼女に勝手になっていたりする。一時期は千穂が俺の隣にいたと言う噂が広がったりもした。

「新戸先輩が成長したとなると少し……寂しいです」

「なんでだよ」

「知っているはずの先輩が少し遠くに行ってしまったような気がしたので」

「お前切ない事言うねえ」

転校して少しは成長したのだろうか。昔は愛想のかけらも滅多に見せないような奴だったのにな。中学生のくせにやたら大人ぶっていた。

「もう少し真面目にやってください」

「生徒会長ですから模範的な態度をとってください」

「しっかりしてください」

ちよつと冗談で後ろから胸揉んでやったら大声で泣き出すし……本当、あの時は対処するのが大変だったぜ。

俺が思い出に浸っていると千穂の声が聞こえてくる。

「文通の事ですが」

「今度はそれか？どうしたんだよ」

「最初の方はちゃんとした文章を返してくれていたようですけど……途中から徐々に字が雑になり、内容も薄くなってきたような気がしました」

千穂には悪いが忙しかったのだ。しかし、びっしりと書かれた文字を読んでそれにいちいち返していくのも大変なのだ。段々文章の量も増えていったし、俺の文章は最初と同じぐらいのはずなんだけど……思った以上に千穂が沈んでいるように見えたので謝っておくことにした。

「あ、ああ……悪いな」

「最後の方は絵を描いてごまかしている感じがしました」

結構頑張って描いたほうである。しかし、お気に召さなかったら

しい。勝手に描いたら莫大な著作権料を払う羽目になる危険な香りのする黒いネズミとか、勇気と愛だけが友達のあれとか…他にも色々描いたんだぜ？

「はつきりいいいますが私と文通するのは…嫌でしたか」

俺は首を縦に動かした。

「……そうですか」

あからさまに落胆しているようだ。

「そうだな。出来れば電話の方が俺はよかったよ。直接声聞けるし。ま、今はこうやってまた同じ高校に通っているんだからそれでいいだろ」

「相変わらず意地が悪いんですね」

「千穂がさつき『少し寂しい』とか言うからだよ。不満か？」

「……不満ですが、私も今はそれでいいです」

ぶすつとした感じで千穂は外の景色を眺めていた。

「……新戸先輩、来たようです」

「お、そうか」

千穂のしている景色を見ると……黒塗りの車が一台、駐車場でバックしていた。

第六話：来てほしい春

第六話

「いらつしゃいませ」

店員がマニュアル通りの声かけをする。ファミレスに入ってきたのは二人の少女と一人の老紳士。

一人目、黒髪縦ロールでスタイル抜群の高飛車そうな女子生徒。二人目、少しトロンとした目つきで、ちよつとぼつちやりした感じの女の子……こつちも結構胸があつて見ていて和む。三人目はオルバツクの銀髪に細面の初老の男性である。

これで掴みはばつちりとか何とか話しながらこちらの方へと歩いてきた。

「羽津高校の生徒さんですわね？」

「ええ、そうです」

否定するわけにもいかないので素直に頷いておいた。女子生徒二人が俺たちの席の前に座り、初老の男性は別の席で待機していたりする。

「はじめまして……わたくし、第一東羽津女子学園高校の生徒会長、大久保紗枝ですわ」

「東校の書記長である湯河原美穂です」

俺は衝撃を受けた。『ですわ』口調とかこれまで生きてきた中で聞いた事のない語尾である。『つす』とか『でやんす』は中学校の頃マジでいたからな……まあ、女子の知り合いがあまりいなかったから『ですわ』口調は聞けなかっただけかもしれない。

衝撃を受けている俺の代わりに千穂が自己紹介をしていた。

「羽津高校生徒会の倉山千穂です……新戸先輩、自己紹介お願いします」

「え、ああ……。羽津高校生徒会長、二年A組新戸風太郎です」

自己紹介を終えて俺は早速本題に入ることにした。さつさと終わ

らせることによってもしかしたらどっちかの女の子と仲良くなるチャンスがやってくるかもしれない。声を賭ければいいって？そんな恥ずかしい事出来るなら今頃俺の彼女は二桁を超えている事だろう。「軽く読ませてもらいました」が具体的な説明をお願いできますか」「湯河原さん、説明お願いしますわ」

芝居がかったような指パッチンをやる。すると隣の少女がいつの間にか準備していた書類を読み上げ始めた。

「はい、えーっと、こっちの羽津女子学園高校……面倒なので女子高はそちらの高校と将来的に合同で文化祭を取り行いと思っているのです。ただ、今年からそういった行事をやるのも早すぎるので今回は裏方に回ると言う提案をさせていただきました」

「裏方？」

俺の疑問に生徒会長を名乗った大久保さんが口を開く。

「ええ、わたくしたちの文化祭は約二週間後、そちらの文化祭はさらにその後ですわ」

確かに、予定としてはまだ準備期間がある。しょぼいところはいよばいが、やる場所は模擬店まで出すと言う頑張り具合……というのも、運動会がいいか、文化祭がいいかでもめることもあり、決定権は生徒会長が握る事となる。

まあ、運動に向かないようなおデブさん達からのお願いによって文化祭にさせてもらった。

「はあ、なるほど」

「ですから、明日からこちらに生徒を派遣していただきたいのですわ」

「どういったことをする予定なのですか？」

初めて首を突っ込んだ千穂はしっかりと話をまとめてくれていた。偉い後輩だ。でも、ノートの端に『新戸先輩が女子生徒に目を奪われていた』とか余計なことだぞ。

「主に肉体労働ですわ」

「肉体労働？」

「はい、グラウンドに屋外ステージを作ってもらいたいのです。一週間程度でお願いします」

「……素人の私達にそういったものは出来ないと思いますが？」

「わたくしはあなたのようなオチビさんに頼んでいませんわ」

むっとした表情で俺の方を見る千穂。俺が言っただけじゃないだろ。

向こうの生徒会長さんはテーブルに肘を立てて指を組み、俺の方を見てくる。

「で、返事はどうしますの？」

「わかりました、やりましょう」

千穂が抗議の目で俺を見てくるが…後で説明する事しよう。

「そうですね、それは嬉しいですわ。そちらが文化祭になった時はこちらからも人数の足りないような場所に人を派遣でどうでしょう？」

「わかりました」

「交渉成立ですわね。湯河原、帰りますわよ」

「はい、失礼しますね」

二人はファミレスから帰って行く。執事さんが俺たちの飲み物代まで払ってくれたようである。

俺たち二人もファミレスを出て車に乗り込む二人を見送ることにした。

「新戸先輩、なんで出来もしないような事を承諾したのですか？」

「なーに、こつちにも考えがあるんだよ」

「考え？」

「そうだ」

詳しく説明しようとしたところで、湯河原と呼ばれた女子生徒が車から出てきて走ってきた。うん、いい揺れだ。

「すみませーん」

「何ですか？」

「あの、携帯の番号とアドレス交換してもらいたいんですけど」

「ええ、いいですよ」

「ありがとうございます」

生徒会長をしていて一番嬉しい時である。よかった、生徒会長になつて。

「ではまた、明日の放課後こっちの高校で会いましょう」

「はい」

俺は黒い車を見送りつつ、何とか頬の緩みを耐え抜いた。

「新戸先輩、明日から大変ですね」

「そうだな。とりあえず体躯のよろしい連中を何人が集めとくしよう……千穂はどうする？」

「もちろん一緒に行きます。新戸先輩のお目付け役として」

「……あいよ」

そういえば朝、黒髪縦ロールのお嬢様を見かけた気がするな。意外と家が近いのだろうか……とりあえず、明日から忙しそうである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2225y/>

世界の窓が全開ですよ

2011年11月14日03時19分発行